

『こゝろ』——「先生」の生——

副島 久美子

はじめに

夏目漱石はエゴイズムの問題に取り組み、それを確立した作家の一人である。我を追究する漱石の真摯な姿勢を讀者はおよそ全作品にみることができるのであるが、それはまさに人間の心に潜む我執こそが、漱石文学の一貫したテーマであったことを我々に気付かせるものであろう。漱石は自己を真剣にみつめるあまり、自己との利害が必ずしも合致するはずのない「他者」の存在と、そこに生じる我執という問題を避けられるはずもないことを痛切に感じていたに違いない。誰もこの世に存在する限り、自己とそれを取り巻く他者との関係を全く断ち切ることはできない。本来ならば「他者」もそれを認識する自己によって多種多様であるはずだが、どう定義されようとも日本文学においてこの問題を最も深く考察したのは、漱石だと言ってよい。それは社会において存在する自己というものを漱石ほど真

正面から取り上げた作家はほかにいないからである。

ここでは、自己とそれ以外の者との関係を後期の作品『こゝろ』において考えていく。漱石の一身ともいえる「先生」の言う「淋しさ」は、「先生」の周囲の人々とは分かち合うことのできないものだったのか。固有名詞を持たず、「先生」と共に語られる人物について、その関わりを「先生」の生き方、そして死と併せてみていきたい。

一、「私」

「私は死ぬ前にたった一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる。あなたは其たつた一人になれますか。なつて呉れますか。」(上・三十一)

後期三部作の結びである『こゝろ』の中で「先生」は、当時青年だった「私」にこう訴える。固有名詞を持たずに、「私」としてしか作品に登場しないこの青年を単なる記述者とみるべきなのか、あるいは物語の一主人公としてみる

のが適当なのか、様々な問いかけがこれまでもなされてきた。作品の核である遺書を残す「先生」にとって、この「私」という存在はどのように映るのか。「先生」がこの世で信用できるたった一人の人間に選んだのがこの若者であるならば、「私」に語るということ自体が「先生」にとってもまた漱石にとっても、意味のあることだと言えるのではないだろうか。

「私」と名乗る人物の描かれ方は内田道雄（註一）がいうように『彼岸過迄』でみられたような、複数の語り手が登場し、それが相互に影響を及ぼし合うという構成に則ったものと考えられる。『こゝろ』は「私」という青年が「先生」と呼び慕う人物について、自分の眼を通して語る「先生と私」、ついで「両親と私」、そして最後に「先生」の視点で書き残された「先生と遺書」という上中下の三章で成り立っている。さらにその中にも「私」には「先生」のみならず、過去の「私」といった自分を見る眼も存在しているように感じられる。

作品全体のこの告白がいつ、また誰に対してなされたものであるかについてはここではふれないことにするが、「私」が「先生と私」で「其時私はまだ若々しい書生」（一）、「経験のない当時の私」（八）、「其時の私は既に大學生であつた。始めて先生の宅へ来た頃から見るとずつと

成人した気であつた。」（十一）と何度も回想しているように、語り手である「私」が「若い私」とは異なることは疑い得ない。そしてそれは同時に、彼が「先生」と呼んでいた人物を「若い」視点とはまた異なった角度から眺めていることになり得るのである。「先生」が「鑄型に入れたやうな」（二十八）人間はいないと「私」に語るように、ここには完全な正義や悪といった絶対的人間観もない。読み手である我々に「先生」とつながりをもたせるはずの「私」ですら「若い」時分には「先生」と慕っていたが、「先生」の遺書を読み終えた後には「私」の「先生」に対する見方も、ちょうど自分を見るように変化している可能性を示している。その結果、読者は「私」の眼を通じて一人の人間を相対化して解釈することができる。

そして漱石にとっても、「時勢」も「箇人の有つて生れた性格」（下・五十六）も自分とは違ふと思われる青年「私」を設定し、作品上相対視することが可能であったのも、自己と異なる他者の存在を意識し得たからにはかならないであろう。他者の存在を認識することは自己を絶対視せず、自分の非を認めざるを得ない姿勢を表しているのではないだろうか。

しかし、読者にもそのように解釈されるこの『こゝろ』という作品全体の、「私」と名乗る人物の眼を通した前半

の觀察風な文章よりも、「先生」本人が告白した後半の遺書のほうにより比重がかけられているという構成をみても、読み手は「淋しい」感じを抱かざるを得ない。「先生」が自分の命を渡したといつても過言ではないこの遺書も、二人の距離を感じさせるものと受けとられるからだ。新聞掲載上諸々の都合があったとしても、本人の視線が全体にとって最も重要な部分を占めるということは、相對視することの意味や他者との関わりを我々に今一度深く考えさせるものといえよう。

それでも「先生」は遺書をただ一人の人間に残した。告白する相手として、「先生」が選んだのが唯一「私」であるならば、そこには必ず何か意味があるはずだ。「先生」は自分の過去を背負って行き続け、まさに決死の覚悟で自分の「血」を「浴びせかけやう」(下・二)としたのである。

「私」という存在は流動的なものであり、「私」から見た「先生」像は変化しているとも考えられるが、それに對して「先生」の眼に「私」という人物はどのように映っていたのだろうか。「先生」が「私」に、「私は淋しい人間です」と言い、続けて

「私は淋しい人間ですが、ことによると貴方も淋しい人間ぢやないですか。私は淋しくつても年を取つて

ゐるから、動かずにゐられるが、若いあなたは左右は行かないのでせう。動ける丈動きたいのでせう。動いて何かに打つかりたいのでせう。……」(上・七)

と語つたように、「私」は「先生」と同じ要素を持った人間である。「先生」の遺書を受け取つた「私」はどうあれ、少なくとも「先生」はそのように感じていたのではないだろうか。天涯孤独であつた「先生」が世代も経験も異なる「私」に、自分の過去を「自分で自分の心臓を破つて」(下・二)打ち明けたのは、「私」の中にそれを生かす素材のようなものを認めたからではないだろうか。

若く、自分を慕ってくる「私」と交流を重ねながら、同じ時間を過ごしながらも、おそらく「先生」はその間中「私」とある意識をもって接していたのではないか。「私」という人物は「先生」の社会との唯一の接点であり、また自分を含めた人間信頼の最後の光のような存在であつただろう。

「先生」と「私」との出会いには「私」から働きかけたものであつた。西洋人をみつけ「不思議」で「珍らしく」感じた「私」は、「単に好奇心の為」(上・二)に「先生」に近付いたのである。しかしその後の二人の間柄に「私」の好奇心のかけらでも「先生」がみつけたとすれば、この遺書はこの世に出ることはなかつたであろう。「私」はこう

振り返る。

私は不思議に思つた。然し私は先生を研究する気で其宅へ出入りをするのではなかつた。私はたゞ其儘にして打過ぎた。今考へると其時の私の態度は、私の生活のうちで寧ろ尊むべきものゝ一つであつた。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際が出来たのだと思ふ。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向つて、研究的に働らき掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなく其時ふつりと切れて仕舞つたらう。若い私は全く自分の態度を自覚してゐなかつた。それだから尊いのかも知れないが、もし間違へて裏へ出たとしたら、何んな結果が二人の仲に落ちて来たらう。私は想像してもぞつとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れてゐたのである。(上・七)

青年「私」の態度は「先生」から見て「真面目」なものであつた。ここでは若さからきているのであろう。「真面目」さは、漱石の他の作品にも表れている。『虞美人草』では迷える小野は最後には「真面目に分かつたです」と語り、また越智治雄も指摘するように『行人』においてもHさん一郎について「兄さんは真面目です」と手紙の最後で告げている。さらに越智は「真面目というひどく素朴に

もみえる言葉に、漱石の託しているのは自信の倫理性の全重量のようにさえみえる。」(註2)と述べる。そう考えると「私」の無意識の「真面目」さは、漱石の分身の一つである「先生」にとつてこころの奥底に希求するものであつただらう。

間違ひなく、「先生」にも人間を信用した時期は存在した。「純なる尊い男」(下・九)であつた「先生」は、血のつながる叔父に金銭的な面で裏切られる。さらに自分までも「お嬢さん」をめぐる恋で親友Kを裏切り、間接的にKを殺したと自覚している「先生」は、自分をも含めた全ての人間に対して不信感のはての絶望感を抱いている。そんな「先生」が自分の罪を語るといふことは、自分も我執から逃れられない人間であるといふことを外に向かつて認めることにはかならない。そしてその相手を選ばれたのが「奥さん」ではなく「私」であるといふことは、「先生」にとつてこの二人の人物が「我執」といふ点において、別個のものとして認識されていたといふことではないだらうか。もちろん、「先生」が「罪」とみなしている行為には「奥さん」が深く関わっていたといふ事實は無視できないが、「奥さん」以外の誰か、ではなくまぎれもない「私」にだけ遺書は残されたということに「私」に対する眼をうかがい知ることができよう。我執によって社会に背を向け

た「先生」は、また自己の我執を語ることで世界とつながろうとしていたのではないだろうか。「先生」は言う。

私の過去は私丈の経験だから、私丈の所有と云つても差支ないでせう。それを人に与へないで死ぬのは、惜しいとも云はれるでせう。私にも多少そんな心持があります。たゞし受け入れる事の出来ない人に与へる位なら、私はむしろ私の経験を私の生命と共に葬つた方が好いと思ひます。実際こゝに貴方といふ一人の男が存在してゐないならば、私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にはならないで済んだでせう。私は何千万とゐる日本人のうちで、たゞ貴方丈に、私の過去を物語りたいのです。貴方は真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと云つたから。(下・二)

「先生」は「私」に自分の過去を語つた。本来ならば他者であるからこそ意味をなす告白も、ここでは自己を受けとめることをわずかであれ期待しているからこそ「私」になされたように思われるのである。三浦泰生が「私」と「先生」を「正に精神上の、あるいは魂の上での親子に外ならなかった。」(註3)と言ひ、先の越智治雄が「先生は多くの点で「私」の無意識な部分を意識化した存在なのである。したがって、便宜的に言えば「私」は先生のミニ

チュアだったのだ。(略)先生と「私」の間に、愛または友情の可能性が真にあったとは思われない。「私」は先生にとつてとうてい真の他者たりえないのだから。」(註2)と指摘するように、「先生」と「私」は深いつながりを持つた同質の人物であった。少なくとも「先生」から見れば、自分の過去を語るに足る人物であったと言えよう。だからこそ「先生」の遺書は自分の過去を懺悔したものである。「先生」は青年であった「私」に教訓を与え、それを「私」の人生に生かして欲しいと願つて自分の過去を託したのである。そしてそれはまさに、「先生」の眼には若い「私」が自分と同じ要素を持った人間として映つていたからなのではないだろうか。「先生」が終始、「私もKの歩いた路を、Kと、同じやうに辿つてゐるのだ」(下・五十三)と過去を引きずり、そのままそれを自分の未来にまで突き進めてしまったように。

「先生」はただ一人「私」に自分の過去を、自分が過去に犯した罪を語つた。そしてその遺書は、「先生」が自殺するということなくしては誰にも見せられるはずのないものであった。淋しい「先生」は「殆んど信仰に近い愛」(下・十四)を抱いていた「お嬢さん」を妻として共に日々を過ごしながら、また「私」に慕われようとも、結局は死ぬまで自分の「こゝろ」を開くことができなかつたの

である。自分もまた我執を持つ人間であるということを確認しながらも、死ぬまでそれを表に曝け出すことができなかったのである。それでも、遺書の中で「私は今自分で分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴せかけやうとしてゐるのです。私の鼓動が停まつた時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。」(下・二)と最後に語る「先生」は、佐々木雅發(註4)の言うように、「いまもつてこの世界の心理を信じている」ことになるのではないか。また「私」との関係の発展とまではいかずとも、「私」に未来を託したように感じられる。そう考えると自殺という形で「先生」の生涯は閉じたものの、世の中や人間と、その「こゝろ」に完全に背を向けたのではないとも思われるのである。「先生」は周囲との断絶を感じ、自分をも含めた人間の「罪」を深く思いながらも再び「私」と会話を試みる。その結果はどうであれ、「先生」の試み自体にはやはり捨てきれない人間への想いがあるように感じられる。

「若々しい書生」(上・一)、「先生自身の経験を持たない私」(上・二十七)から見ても、「先生」は「人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懐に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出来ない人」(上・六)であった。「先生」は自分をみつめ、小さ

く、醜く感じるあまり周囲の世界とふれあうことを求めようとしなない。そしてこの姿勢は、漱石のそれと少なからず重なるのではないだろうか。小宮豊隆は次のように語る。「漱石は実生活に於いて、淋しかつた。相手に求めることの多かつた漱石は、求め求めて人間に愛想をつかしつつ、なほ人間に愛想をつかしきる事が出来ないから、淋しいのである。」(註5)と。漱石の分身である「先生」の生き方、そして死に方にもそれは表されると言えるだろう。「自ら与へるだけで満足して、相手に求める事をしない」(註5)漱石は、「先生」の人生の終結に際してもその態度を貫いている。「先生」は言う。

私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに、貴方にも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もし左右だとすると、それは時勢の推移から来る人間の相違だから仕方がありません。或は箇人の有つて生れた性格の相違と云つた方が確かも知れません。私は私の出来る限り此不可思議な私といふものを、貴方に解らせるやうに、今迄の叙述で己れを尽した積です。(下・五十一)

「先生」の死を「明治の精神に殉死する」(下・五十六)としたのはまぎれもなく漱石自身の認識であつて、漱石のまわりにいる「私」達には理解されるものではなかつ

たのかも知れない。自らを「不可思議」と語る「先生」の遺書に視点を置いて、「先生」は自分を慕う青年にも積極的な肯定や理解を望んではいないように見える。そこにはまた、理解されたいが「時勢」や「箇人の有つて生れた性格」の異なる「私」には不可能であろうという想いも出かかえる。しかしそこに明治を生き、時代の終焉を迎えた漱石本人の心情が表れている。自殺という「先生」の死より、むしろそのきつかけに作者漱石の共感を見ることができないだろうか。漱石もまた、「淋しい人間」(上・七)の一人であったように思われる。「先生」の死を支え、生を捧げるべき明治の誇りは、またまぎれもなく漱石自身のものであったと言えよう。

二、K

そしてもう一人、「先生」の遺書を成立させた人物—Kについてふれねばならない。Kは「私」が「先生」と出会った時には既にこの世にいなかったのだから、当然「私」は「先生」の遺書でKを初めて知ることになる。つまり、「私」は「先生」の眼を通してしかKという人物を把握することができないのだ。

遺書の中でKは、「先生」と「小供の時からの仲好」で「同郷の縁故」があるとまずは語られる。二人は「山で生

捕られた動物が、檻の中で抱き合ひながら、外を睨めるやう」(下・二十)に東京で過ごす。その若い「先生」から見て「頑固」で「大胆」、「強かった」(下・十九)Kは自分の決めた道を突き進んでいく。この二人の性格上の相違については述べなくとも、「時勢」を同じくしているという点ではKは明らかに「私」よりも「先生」に近い存在であったと言えるであろう。

「私」よりもKが「先生」にとって、より同質の存在であったというのはKが「先生」の遺書でしか登場しない、言い換えれば「先生」の意識の中においてのみ語られる人物ということも関係があるのでないだろうか。もちろん設定上からも二人は同じ時期に同じ故郷から切り離されており、また母親との関係の欠如などという共通点は認められる。しかしそのみならず、Kの言動は常に「先生」の眼を通してのみ語られ、最期に残した遺書ですら「先生」から見れば「内容は簡単」で「寧ろ抽象的」(下・四十六)であったと述べられるのである。また、「先生」がKの自殺の原因であったと考えた「お嬢さん」への求婚について、Kがそれを知った時の様子すら「先生」が「奥さんの云ふ所を綜合して考へて」(下・四十七)いるだけなのである。けっしてKは自己の言葉で語ってはいない。そしてこのことは、結果的に「先生」の自殺を不自然に思わ

せ、「先生」から「真面目に人生から教訓を受けたい」(上・三十一)と欲する「私」との距離を考えさせる背景の一つになつていないだろうか。前述した、作品前半部において見られたような相対的な視線が、ここには存在しないのである。「先生」の眼を通して映るKは、とりもなおさずKという人物に対する「先生」の態度そのものを意味していると言えよう。「お嬢さん」や「奥さん」からの情報は皆無に等しく、「私」も含め我々が知りうるKは「先生」のK像にすぎないのである。

柄谷行人(註6)は晩年の漱石作品における登場人物について、「もはや、作者は、彼らを上から見おろしたり操作したりする立場に立っていない。どの人物も、作者が支配できないような「自由」を獲得しており、そうであるがゆえに互いに「他者」である。」と述べる。この『ころ』の中で、「自由」なのは誰だろうか。ただしここで問題にしているのは作者からの「自由」ではなく遺書の書き手である「先生」からのそれである。「先生」にとってKは自分と同質の人間であり、「先生」の意識の下において存在した。「先生」の悲劇の発端はここにあったとしてもよいのではないだろうか。

「先生」は自己の経済力を頼りに、自分の意志で「彼の剛情を折り曲げるために、彼の前に跪まづく事を敢てし」

(下・二十二)てまでKを「自分の家」まで連れてくる。叔父に裏切られてもなお自分を疑わなかった「先生」は、「溺れかゝつた人を抱いて、自分の熱を向ふに移してやる覚悟」(下・二十三)でKの物質的支援者として共に暮らし始める。この時Kは「先生」の支配下にあるはずであった。

しかしそれが「お嬢さん」という一人の女性をめぐり、事態は「先生」の予想を逸脱することになる。Kを「人間らしくする第一の手段」(下・二十五)として「異性の傍に彼を坐らせ」(同)た「先生」は、Kの告白を聞いて愕然とする。「先生」の恋を行く手をふさぐ者が他の誰でもない、Kであったからこそ「先生」の衝撃は大きかったのである。「先生」にとってKは、これまで常に自分よりも強い存在であった。「中学でも高等学校でも、Kの方が常に上席を占めてゐました。私には平生から何をしてもKに及ばないといふ自覚があつた位です。」(下・二十四)と語る「先生」にとって、Kの苦しい告白はKが自分の「道」からはずれた恋を口にしたというその想いが「先生」にも理解できるからこそ、「先生」にとって脅威だったに違いない。しかも「先生」にしてみれば、この下宿においてだけはKより自分の方が「偉大」(同)な存在であるはずではなかったか。「先生」が自ら、「成るべく、自分が中心に

なつて、女二人とKとの連絡をはかる様に力め」（下・二五）、「彼等を接近させやうとした」（同）のだから。「先生」は無意識のうちに、今までKから受けた精神的な影響を己れの経済力をもとに今度はKに与えようとしていたのである。

Kを下宿に引き入れることは、そこで「自分の心が自分の坐つてゐる所に、ちゃんと落付いてゐるやうな氣」（下・十三）になつた「先生」にとつて、Kを「人間らしく」するのにも最も適した手段であつただろう。「先生」の言う「人間らしい」という言葉の土台には「お嬢さん」に対する感情があつたものの、「最初からKなら大丈夫といふ安心があつたので、彼をわざ／＼宅へ連れて来た」（下・二八）のだから。さらに「先生」はその安心感を元に、「お嬢さん」とその母である「奥さん」という今の自分の置かれてゐる環境をKに体験させ、結果的に自分の持つ「お嬢さん」への想いを理解とまではいかずとも、肯定してもらひたかつたのではないだろうか。作田啓一（註ア）の言葉を借りれば、「先生」は「たとえ策略のいけにえになつたとしても、お嬢さんが結婚に値する女性であること」を、尊敬するKに保証してもらひたかつた」のであり、「そしてまた同時に、このような女性を妻とすることをKに誇りたかつた」のではないか。「お嬢さん」と出会つた

頃の「先生」は、「金に対して人類を疑つたけれども、愛に対しては、まだ人類を疑はなかつた」（下・十二）。しかし郷里の事情を「奥さん」と「お嬢さん」に話した後には「猜疑心」が起こり、「奥さん」もまた叔父と同じような「狡猾な策略家」（下・十五）として見えるようになってしまふ。「先生」と「お嬢さん」との関係は、Kの出現以前に既に「先生」の心の中で迷いを生じるといふ性質のものであつた。「先生」は自分より強く、先導者であるKの後押しが欲しかつたのではないだろうか。そして「先生」の想いとは別な形で実際に後押しされることになるのだが、「先生」と同質の人間であり「お嬢さん」を女性として認めてくれるはずのKが、恋のライバルとなるのは至極当然のなりゆきであつたと言えよう。

「先生」は自分が引き起こしたKの最期をおそらく何度も振り返つただろう。「先生」は「向ふむきに突ツ伏して」（下・四十八）いるKに声をかける。敷衍際まで進んだ「先生」は「あゝ失策つた」と思い、「棒立ちに立竦む。しかし「先生」はKの生き死によりも、まず自分を選ぶ。「私を忘れる事」ができなかつたのである。遺書を読み終えた後、初めて「先生」は「襖に迸ばしつてゐる血潮」（同）に氣が付く。Kと「先生」の間を仕切るものとして襖が強く印象付けられたのは、Kが「お嬢さん」への

恋を「先生」に告白した時からであろう。「不意に仕切の襖を開け」、「顔を見合わせ」（下・三十五）たKに心を打ち明けられた「先生」はどうすることもできなかった。

「先生」は次のように回想する。

私はKが再び仕切の襖を開けて向ふから突進してきて呉れ、ば好いと思ひました。（略）私は午前前に失なつたものを、今度は取り戻さうといふ下心を持つてゐました。それで時々眼を上げて、襖を眺めました。然し襖は何時迄経つても開きません。さうしてKは永久に静なのです。

其内私の頭は段々此静かさに掻き乱されるやうになつて来ました。Kは今襖の向で何を考へてゐるだらうと思ふと、それが氣になつて堪らないのです。不斷も斯んな風に御互が仕切一枚を間に置いて黙り合つてゐる場合は終始あつたのですが、私はKが静であればある程、彼の存在を忘れるのが普通の状態だつたのですから、其時の私は余程調子が狂つてゐたものと見なければなりません。それでゐて私は此方から進んで襖を開ける事が出来なかつたのです。一旦云ひそびれた私は、また向ふから働らき掛けられる時機を待つより外に仕方がなかつたのです。（下・三十七）

この時に初めて「先生」はKを下宿の中で、殊に「お嬢さ

ん」との関係において自分と「襖」を隔てた存在であるということを強く意識せざるを得なかつただらう。「先生」の意志で連れてきたKが自分の意図から外れた時に、二人の間にある仕切りに氣付かされたのである。

ともかくも「先生」はKを押し退け、恋の勝利者となる。Kの遺書の内容に肩を撫で下ろした「先生」の眼に飛び込んできたのは、Kの生を懸けた死そのもののような「血潮」であつた。Kの血を浴びた「先生」はKと同じ「運命」を歩き始める。「もう取り返しが付かないといふ黒い光が、私の未来を貫ぬいて、一瞬間に私の目の前に横はる全生涯を物凄く照らしました。」（下・四十八）とこの時既に「先生」は語っている。さらに「段々落ち着いた気分」で、「同じ現象に向つて見る」と「私もKの歩いた路を、Kと、同じやうに辿つてゐるのだといふ予覚が、折々風のやうに私の胸を横通り始めた」（下・五十三）と感じた。「先生」は、「死んだ横で生きて行かう」（下・五十五）と決心するが、結局は自らも死を選ぶ。Kの死の要因の一つである「お嬢さん」を手に入れても、それが「先生」の生の支えにはなり得なかつたのだ。遺書で「人間の血の勢といふものの劇しいのに驚きました。」（下・五十）と語つた「先生」は、己れの最期に今度は自分が「私」にその生き血を浴びせかけようとしたのである。

自己と同質の人間から彼等の血潮を浴びせられた、「時勢」も「有つて生れた性格」も異なる「先生」と「私」。

「先生」がKの死や遺書を自己の問題として深く認識していればいるほど、自分が遺書を残す「私」への想いも「先生」にしかわからぬほどの、特別なものがあつたはずである。Kの運命をそのまま重ね歩いてきた「先生」は、「私」だけを選んだ。前述したように、「私」は単なる語り手ではない。「先生」と自分という二人の關係を通してKと「先生」との両者の生死を繰り返し、読者にそして誰よりも「先生」自身を考えさせる存在なのである。

田舎にいて「先生」の遺書を受け取った「私」は、病床に伏す父を置いて「先生」のもとへと急ぐ。この「両親と私」という章の末尾における、もうこの世にいないと思われる「先生」のもとへと向かつて「私」が故郷を飛び出すという場面に諸々の見解があるのは当然だと思われる。

「小説として、やはり不自然な収束」(註8)などという批判もあるが、先に引いたように精神的親子(註3)である「先生」と「私」のつながりの強さといったものがこちらに伝わってきていることは間違いないであろう。さらに、前述のように「先生」にとつての遺書というものの重みを考えると、読み手には不可解のように感じられるこの「私」の行動も、「先生」にとつてはけっして無意味なも

のではなかつたように思われるのである。「先生」が「私」に、「兎に角あまり私を信用しては不可ませんよ。

今に後悔するから。さうして自分が欺むかれた返報に、残酷な復讐をするやうになるものだから」と言い、さらに「かつては其人の膝の前に跪ついたといふ記憶が、今度は其人の頭の上に足を載せさせやうとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥ぞけたいと思ふのです。」(上・十四)と伝える時、明らかにKと「先生」の過去について語っている。Kの自害に際して、その最後の最後まで自己を捨てることができなかつた「先生」にとつて、こういった「私」の行為こそ「真面目」なものではなかつたか。自己と同質の存在である人間の死に對し、「私」が「先生」と全く異なる行動を起こしたことで、「先生」の残した遺書が「私」に意味をなすものであつたと確認してもよいであろう。「私」と「先生」との關係を今一度考えた時、この場面は「先生」に浴びせかけられた血によつて、「私」の胸に「新しい命」が宿ることがあり得るといふ漱石の想いの表れのように感じられるのである。Kとの間に「先生」が意識した「襖」を、若さゆえか、「私」は「無遠慮」に「先生」の「腹の中から、或生きたものを捕まへやう」(下・二)として切り開いていく。Kの歩いた道を結局は辿ってしまった「先生」にとつて、若

い「私」は自己と同質の存在でありながらも、「先生」の遺書を受けとめ、そこから「私」の道を進んで行くべき人物ではなかっただろうか。瀕死の父のいる故郷で「先生」の手紙を手に、そのまま東京行きの汽車へ飛び乗った「私」は、自分にその素地があることを証明してみせたのである。

三、「お嬢さん」

最期に、「先生」とKとの運命の鍵となった人物「お嬢さん」に関して述べるべきであろうが、「お嬢さん」についてふれるということはそのまま「先生」の恋愛を語ることになるだろう。

「先生」はKを裏切り、「殆んど信仰に近い愛を有つてゐた」(下・十四)「お嬢さん」と結婚する。Kが下宿に入る前にも、「先生」は何度となく「思ひ切つて奥さんに御嬢さんを貰ひ受ける話をして見やうかといふ決心」(下・十六)をするが、結局口に出すことができずにいた。「先生」がKを自分の意志で下宿先へ連れて来た後、Kが「お嬢さん」への恋心を「先生」に打ち明けてから、「先生」は動かざるを得なくなる。そしてこの時初めて、「先生」は「お嬢さん」への想いを確かなものにしたかのようである。

これは「こゝろ」の前作である『それから』の代助にも言えることなのでないだろうか。中山和子(註9)は、「三千代をつれ新橋駅を発つ平岡の眼鏡の裏に、代助が「得意の色」を認めたとき、はじめてこの友達を憎く思うところから「それから」は本格的に展開する。」と述べる。この嫉妬はまた、『彼岸過迄』の千代子と須永の關係においても見られるものだ。柄谷行人(註10)は次のように語る。

「須永の話」では、須永と千代子の動きの取れない關係が書かれている。須永は千代子を愛しているのかわからない。第三者があらわれると嫉妬するが、嫉妬が別に愛の証拠でないことは千代子にも指摘されている。

また柄谷はこれを「現代人の愛の不毛性を描いているように」と指摘する。

たしかにKの告白を聞いて、「先生」の「お嬢さん」に対する「愛」は進展せざるを得なくなつたと言えよう。しかし「先生」は「お嬢さん」との關係を深めるということよりも、むしろ「Kより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならない」(下・四十四)と覚悟を決め、「奥さん」に切り出す。「下さい、是非下さい」(下・四十五)という「先生」に対し、「奥さん」は「上げてもいい、

が、あんまり急ぢやありませんか」と応える。「先生」は「急に貰ひたいのだ」(同)と声を挙げるが、Kが下宿を訪れることを「先生」のためによくないからと反対していた「奥さん」の眼から見て、「先生」の求婚はやはり「急」なものであった。「先生」の遺書においてはKの「お嬢さん」に対する恋心に気付いていなかったであろう「奥さん」にとっても、「先生」と「お嬢さん」の二人の関係がまだ結婚という段階まで達してはいないように思えたのではないだろうか。

「先生」は遺書の中でこう断言している。

若い女として御嬢さんは思慮に富んだ方でしたけれども、其若い女に共通な私の嫌な所も、あると思へば思へなくもなかつたのです。さうして其嫌な所は、Kが宅へ来てから、始めて私の眼に着き出したのです。私はそれをKに対する私の嫉妬に帰して可いものか、又は私に対する御嬢さんの技巧と見做して然るべきものか、一寸分別に迷ひました。私は今でも決して其時の私の嫉妬心を打ち消す気はありません。私はたび／＼繰り返した通り、愛の裏面に此感情の動きを明らかに意識してゐたのですから。しかも傍のものから見ると、殆んど取るに足りない瑣事に、此感情が屹度首を持ち上げたがるのでしたから。是は余事ですが、か

ういふ嫉妬は愛の反面ぢやないでせうか。私は結婚してから、此感情がだん／＼薄らいで行くのを自覚しました。其代り愛情の方も決して元のやうに猛烈ではないのです。(下・三十四)

「先生」は明らかに嫉妬は愛から生まれるもの、としている。しかしそれもKによつてもたらされた嫉妬であり、その表の面であるはずの愛そのものも友人の出現により成り立つかのようである。「先生」の言う愛は嫉妬という感情によつて裏打ちされ、その裏面を自覚することで確信されるものであった。ともあれ、少なくとも「先生」とつては、それはKを犠牲にすべき「信仰に近い」ほどの愛であつたはずである。しかし、「先生」においてこの恋愛が自己の心の中の苦しみを救うようなものではなかつたのは疑い得ない。結局「先生」の告白は当時者である「お嬢さん」にはなされなかつたことを考えても、「先生」の愛は外に向かう、お互いに理解し合うといった性質のものではなかつたのである。「先生」が「私」に「嫉妬は愛の反面」だと語り、奥さんと「言逆ひ」をして「私」と散歩に出かけ、「もう遅いから早く帰り玉へ。私も早く帰つて遣るんだから、妻君の為に」(上・十)と口にしても、悲しいのは「先生」が、自分の苦しみを「奥さん」になつた女性に話さないでいることである。たとえ告白したところで、

何の解決にもならないことを「先生」が痛切に自覚していることが問題のように私には思われる。そこにこの夫婦の問題が、ひいては「先生」の愛の問題があるのではないだろうか。

この点に関しては、『門』における宗助の態度にも同じことが言えよう。宗助の参禅は突然すぎる感を読者に与えかねないが、それよりもこの参禅という行為が結局宗助一人のものとして終始してしまっているという点が、作品の結末部分と同様に私には印象的である。漱石が何度も扱った三角関係の根本となるものは一人の人間に対する二人の愛情であるが、作品において語られているのは宗助の場合には己れの参禅を妻に隠し、「先生」においてはKへの裏切りとその後もKの死と自分の関係を妻に打ち明けず、一人で苦しんでいるということではないだろうか。さらに、『門』においては安井はこの夫婦にとって外的存在と考えられるが、『こゝろ』の場合では男女の出立点において既にKの問題を抱えているのである。その意味でKはこの夫婦の内的要因であると言えるだろう。彼らの苦しみは、一人の女性を巡ってその心がどちらに傾くかということよりも、一つの愛を欲している二人の関係にあったのである。しかもKがこの世にいない以上、犯した「罪」は「先生」に重くのしかかり、逃れられない過去から夫婦二人の生活

が始まっていく。そして「先生」が感じ続けた罪悪感、三人の関係の中心に位置するはずの人物とは分かち合うことのできないものであった。

考えてみれば、「先生」と「お嬢さん」との間にKとの差をつけるべき甘い雰囲気や恋愛話が特に展開したというわけでもない。結婚する前の「お嬢さん」に対する「先生」の眼や心は全く「肉の臭を帯びて」（下・十四）おらず、それは結婚生活においてもおそらく同じことが言えるであろう。Kの存在を考慮に入れたとしても、最初から異性や夫婦の香りがこの二人の暮らしからは伝わってこないのである。

「子供でもあると好いんですがね」と奥さんは私の方を見て云つた。私は「左右ですな」と答へた。然し私の心には何の同情も起らなかつた。子供を持つた事のない其時の私は、子供をたゞ蒼蠅いものゝ様に考へてゐた。

「一人貰つて遣らうか」と先生が云つた。

「貰つ子ぢや、ねえあなた」と奥さんは又私の方を向いた。

「子供は何時迄経つたつて出来つこないよ」と先生が云つた。

奥さんは黙つてゐた。「何故です」と私が代りに聞

いた時先生は「天罰だからさ」と云つて高く笑つた。

(上・八)

この「先生」の口ぶりからは、「奥さん」との関係にも背を向けているように感じられなくもない。そう考えると、結婚する前にも「先生」は

肝心の御嬢さんに、直接此私といふものを打ち明け
る機会も、長く一所にゐるうちには時々出て来たので
すが、私はわざとそれを避けました。日本の習慣とし
て、さういふ事は許されてゐないのだといふ自負が、
其頃の私には強くありました。然し決してそれ許が私
を束縛したとは云へません。日本人、ことに日本の若
い女は、そんな場合に、相手に気兼ねなく自分の思つた
通りを遠慮せず口にする丈の勇氣に乏しいものと私
は見込んでゐたのです。(下・三十四)

と語るのみで、愛する女性と積極的に対話しようという姿
勢はうかがえない。

結婚後こういつた「先生」と二人きりの生活を過ごして
きた「奥さん」にとって、真実を聞かないまま日々を送る
ことが幸せなことだったのであろうか。一体この二人は夫婦
なのだろうか。「先生」が友人Kと争い、奪つた尊い愛は
このような結婚生活に果たして存在したのだろうか。「先
生」が

私は世の中で女といふものをたつた一人しか知らな
い。妻以外の女は殆んど女として私に訴へないのです。

妻の方でも、私を天下にたゞ一人しかないと男と思つて
呉れてゐます。さういふ意味から云つて、私達は最も
幸福に生れた人間の一对であるべき筈です」(上・

十)

と語る時、「先生」は「筈」という言葉に当然Kの死の意
味を含めてゐるだろう。Kの存在によつて自己の心を「お
嬢さん」に打ち明けることとなつた「先生」はまた、Kが
この世からいなくなることで自己の犯した罪の足元にある
ものを見つめ直したに違いない。そこに「先生」が希求し
たはずの愛があつたとすれば、「先生」はこれほどの長い
時間を一人で苦しんでゐるだろうか。これは、倫理的に生
まれた「先生」の性質とその愛によるものと思われるが、
「金に対して人類を疑ぐつたけれども、愛に対しては、ま
だ人類を疑はなかつた」(下・十二)と語つた「先生」は、
「奥さん」への想いから一人で罪を背負い込み、孤独感に
陥つてゐる。ここに「先生」の言う愛情の表出を見ること
ができるだろう。信仰に例えられた「先生」の「愛」に
とつて心の中における問題が重要なのであり、それは外に
向かう性質のものではなかつたのである。「先生」の愛情
は結果として「奥さん」を悲しませ、「先生」自身を追ひ

つめていったと言ふことができよう。

煤煙事件についての森田草平と漱石とのやりとりを引きたい。「要吉は相手に対して恋愛を感じてはゐなかつたけれども、恋愛以上のものを求めてゐた。霊と霊との結合—人格と人格との接触に拠る霊の結合を求めてゐたのである。」と森田が語るのに対し、漱石は「そんな馬鹿な事があるものか。男女両性が人格の接触に拠る霊と霊との結合を求めるのに、恋愛を措いて他に道があるものか」と一笑に付している。(註11)

果たして漱石から見て「恋は罪惡」(下・十三)で、「神聖」(同)なものと「私」に語る「先生」のそれは恋と言ひ得るものだったろうか。確かに「先生」はKの死について己れの罪を身をもって感じ、そこには「先生」の言う真実がある。しかしその恋の相手である「お嬢さん」に罪の意識が全くないとすると、「お嬢さん」の恋はその「神聖」な一面だけを捉えたものということになるか。二人の関係が漱石の言う恋愛であつたならば、殊に友人であるKを死に追いやってまで希求したものであつたならば当然「先生」と「お嬢さん」の二人が傷つき、罪を背負うべきではなかつたか。

しかし実際には「先生」一人がKの死という事実を苦しみ、「死んだ気で生きて」(下・五十四)きた。しかもその

生の支えとなつていたのは、当事者でありながら事の真相を知らされていない妻なのだつた。三角関係の核とも言ふべき人物でありながら、そして「先生」と結婚生活を送つていながら「奥さん」はKと、夫となつた「先生」そして自分との関係に本當に気付いていないのだからか。おそらく知る術はあつたであろうが、「先生」が口を閉ざしている以上は仮に推測し得たとしても「奥さん」にとつてそれは想像のままであつただろう。「先生」は「奥さん」に何も語つてはいない。ここには岡崎義恵(註12)も指摘するように、「奥さん」を「純白」なものととして眺めるのは妻の不安のためだけではなく、女の愛の中に人道的なものをも認め得ないという「先生」の女性への不信任感が根本にあるという見方もできよう。たしかに「先生」は「信仰に近い愛」(下・十四)を抱き、妻を「世の中で自分が最も信愛してゐるたつた一人の人間」(下・五十三)としながら人格上の、あるいは精神的な結びつきを求めてはいないようにすら感じられる。遺書を「私」に残した「先生」には「たゞ妻の記憶に暗黒な一点を印するに忍びなかつたから打ち明けなかつた」(下・五十二)という想いや、「奥さん」の記憶を「成るべく純白に保存して置いて置きたい」(下・五十六)といった希望があるが、また同時に「奥さん」の心に「ぼんやりとした希薄な点が何処かに含まれて

る」(下・五十四)とも語られているような、あるおき
らめに似た感情もあったのではないか。先の「奥さん」の
心について、「然し妻が私を理解し得たにした所で、此物
足りなさは増すとも減る気遣はなかつた」(下・五十四)
と述べていることから、人間に対する不信が「先生」の
悲劇を生み、悲劇であり続けさせた理由の一つと言えるだ
ろう。

「先生」はKの死について「奥さん」と向き合おうとは
していない。それは「先生」の人間観の表れであろうが、
青年「私」の眼には「奥さん」はどのように映っていたか。
「奥さん」は既にこの世に存在しないKと異なり、「先
生」のみならず「私」からも語られる人物である。「先
生」が遺書で

御嬢さんはたゞ笑つてゐるのです。私は斯んな時に
笑ふ女が嫌でした。若い女に共通な点だと云へばそれ
迄かも知れませんが、御嬢さんも下らない事に能く笑
ひたがる女でした。(下・二十一)

と言ひ、「私」は

今しがた奥さんの美しい眼のうちに溜つた涙の光
と、それから黒い眉毛の根に寄せられた八の字を記憶
してゐた私は、其変化を異常なものとして注意深く眺
めた。もしそれが詐りでなかつたならば、(実際それ

は詐りとは思へなかつたが)、今迄の奥さんの訴へは
感傷を遊ぶためにとくに私を相手に拵えた、徒らな女
性の遊戯と取れない事もなかつた。(上・二十)

と回想する。「先生」が結婚を申し込む段階において陥つ
た「奥さんと同じやうに御嬢さんも策略家」(下・十五)
だという「疑惑」(同)を感じたのは「先生」だけではな
かつたと言つことができよう。さらにこの「奥さん」の態
度について、「実をいふと、奥さんに菓子を買つて帰ると
きの気分では、それ程当夜の会話を重く見てゐなかつ
た。」と述べ、また「尤も其時の私には奥さんをそれ程批
評的に見る気は起らなかつた。」(上・二十)と回想する
「私」の眼には、「先生」の死後に別の「奥さん」像が
映っていると考えられる。

「白ければ純白でなくつちや」(上・三十二)と言う
「先生」は、妻の記憶について「純白なものに一票の印気
でも容赦なく振り掛けるのは、(略)大変な苦痛だつた」
(下・五十二)と「私」に繰り返す。しかし「先生」はま
た、前述したように「お嬢さん」も「策略家」(下・十
五)だという「疑惑」と「お嬢さん」への「信念」とを
「私には何方も想像であり、又何方も真実であつた」
(同)と語り、「殆んど交際らしい交際を女に結んだ事が
なかつた」(上・八)若い「私」にも、「君、黒い長い髪で

縛られた時の心持を知つてゐますか」(上・十三)と問いかけている。「先生」は記憶のみならず妻の存在自体を純白に保ちたがっているように受け取られるが、「人間存在の危うさ」(註13)に常に恐れを抱いていた「先生」にとってそれは容易なことではなく、理想でしかあり得ぬということとは、自明ではなかったか。「先生」は遺書の末尾の部分で

私は私の過去を善悪ともに他の参考に供する積です。然し妻だけはたつた一人の例外だと承知して下さい。

私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に対してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望なのですから、私が死んだ後でも、妻が生きてゐる以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中に仕舞つて置いて下さい(下・五十六)

と青年に語る。そこからは、妻にだけはKの運命と夫の死に全く関係がないと思わせたいという「先生」の訴えに近い想いがうかがえるのであるが、それは逆に「先生」から見れば妻の心の中にも自分と同じように我を認めるといふことになりはしないだろうか。「綺麗な花を罪もないのに妄りに鞭うつ」(下・五十一)のを嫌った「先生」は、「塵に汚れ」(下・九)た己れであつたからこそ妻にその「こゝ

ろ」の奥底にあるものを知らせず、生ある限りは「生まれたまゝの姿」(同)であり続けさせたかつたのである。「妻が己れの過去に対してもつ記憶」をそのままにというのが青年に遺書を託した「先生」の最後の願いであることから、「奥さん」も「先生」の暗い過去と無関係ではないことを暗示しているように思われる。

結局「先生」はKと全く関わりのない、「時勢」も異なる「私」にしか自己の「こゝろ」を開くことができなかつた。「何処からも切り離された世の中にたつた一人住んでゐるやう」(下・五十三)に寂莫だつた「先生」は、「奥さん」の発した「殉死」という言葉に「新しい意義を盛り得たやうな心持」(下・五十六)を起こし、自殺する決心をする。「先生」の遺書における「明治の精神」を次世代の青年「私」がどのような意味で捉えたかはわからない。そしてそれは明治天皇の崩御に衝撃を受け、「最も強く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き残つてゐるのは必竟時勢遅れだ」(下・五十五)と感じた「先生」を笑つて取り合わなかつた「奥さん」についても同じことが言える。「奥さん」は少なくとも「私」よりは「先生」と同じ時代を生きたはずだが、「先生」の言つた「私ども」の中には含まれておらず、「先生」は「私」にだけ「新しい命」(下・二)を期待しようとして死を選ぶ。「先生」の「最

も信愛」(下・五十三) する人間でありながら「先生」の「こゝろ」を覗くことさえできなかった「奥さん」は、人間の「こゝろ」の光も影も知らずにいることだろう。「先生」は、そして漱石はそれらが同一のものである。「こゝろ」から生じることを痛切に感じていたに違いない。

おわりに

自己の我執を自覚し、苦しみながらも「先生」は自分の生に耐え続ける。しかし「先生」の運命を示したようなKの死後、共に過ごした奥さん、そして遺書を託された「私」も「先生」を「こゝろ」の「淋しさ」から救うことはできなかつた。それによって募る「淋しさ」は漱石本人とも相通じるものであっただろう。漱石も人間との真の関わりを求めながらも、それを得ることができない「淋しい人間」であつたのではないだろうか。そして孤独に苦しみなながらも、人間の「こゝろ」を追及する姿勢に「こゝろ」が受け継がれていく所以があるのではないか。認識の差はあれ、「こゝろ」の光と影から誰も逃れることはできないのだから。

註

- (1) 内田道雄「漱石文学の対話的性格」『国文学』、一九八八年八月一日
- (2) 越智治雄「こゝろ」『国文学』、一九六八年四、五、七月、一九六九年六月
- (3) 三浦泰生「漱石の『心』における一つの問題」『日本文学』、第十三巻五号、一九六四年五月
- (4) 佐々木雅發「鷗外と漱石―終らない言葉―」平成二年四月十日、三弥井書店
- (5) 小宮豊隆「心」決定版『漱石全集』八巻、一九三五年十二月、岩波書店
- (6) 柄谷行人新潮文庫『明暗』解説、一九八五年十一月
- (7) 作田啓一『個人主義の運命』一九八一年十月二十日、岩波書店
- (8) 三好行雄「こゝろ」観賞『観賞日本現代文学 五 夏目漱石』、一九八四年三月、角川書店
- (9) 中山和子「それから―へ自然の昔」とは何か―『国文学』、一九九一年一月
- (10) 柄谷行人新潮文庫『彼岸過迄』解説、一九九〇年二月
- (11) 森田草平『続夏目漱石』昭和十八年十一月十日、甲

鳥書林

(12) 岡崎義恵『漱石と則天去私』昭和四十三年十二月一

日、宝文館出版

「心」本文『漱石全集』第九卷、一九九四年九月九
日、岩波書店